

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：20101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17753

研究課題名（和文）精神疾患をもつ当事者のリカバリーに影響する自己開示の要因

研究課題名（英文）The influence of self-disclosure on recovery in people with mental illness

研究代表者

横山 和樹（Yokoyama, Kazuki）

札幌医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：10580053

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、地域で生活する精神疾患をもつ当事者の自己開示量を対象別および内容別に調査し、リカバリーの促進に影響する自己開示の要因を明らかにすることであった。調査の結果、家族や同様の病気や障害をもつ当事者に対しては、情緒的支援が中等度以上になれば、いずれの内容の自己開示量も増え、リカバリーの促進に影響する可能性が示された。一方で、支援者に対しては、情緒的支援が強くなると自己開示量は増えず、リカバリーとの関連性がみられない可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、家族や同様の病気や障害をもつ当事者に対する自己開示が、リカバリーの促進に影響することが明らかになり、自己開示を通じた関係性の構築をリハビリテーションで扱う意義が示された。また、精神疾患と障害の開示だけではなく、生活状況や自分の強みの開示が、当事者のリカバリーの促進に寄与する可能性も示された。これらはリカバリーモデルやストレングスモデルを支持する結果であり、更なる研究がエビデンスに基づくリハビリテーションの実践につながると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate self-disclosure among persons with mental illness living in the community and to clarify the factors influencing the promotion of recovery. The results indicated that self-disclosure to family members and peers with similar illnesses or disorders increases when emotional support is moderate or higher, which may influence the promotion of recovery. On the other hand, the results indicated the self-disclosure to professionals does not increase unless emotional support is stronger, suggesting that it may not be associated with recovery.

研究分野：作業療法学

キーワード：自己開示 情緒的サポート ピアサポート ソーシャルサポート 精神疾患 リカバリー 縦断的研究
ピアサポーター

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省が「入院医療中心から地域生活中心へ」という精神保健医療福祉施策を推進して以来、入院医療依存型の生活支援が見直され、精神疾患をもつ当事者の社会参加が進んでいる。平成 28 年 4 月には、障害者差別解消法が施行され、障害者が主体的に社会参加する権利を保障する動きが具体化された。しかしながら、精神疾患への偏見や差別は未だに根強く、当事者の地域生活移行や社会参加の阻害要因となっている。当事者は、偏見や差別の影響を受け、自分が精神疾患を持つことを知られないよう、自らの経験の開示を避ける傾向にある。

精神疾患をもつ当事者を対象とした開示研究は、多くが精神疾患や障害を話題とした“障害開示”に焦点化されている。自分の症状や障害による生きづらさをどう他者に伝えるかについては、当事者の繊細な問題であり、慎重になるべき行為である。障害を開示することは、相手や伝え方によっては社会的な偏見を助長させてしまう危険性を持つが、当事者が精神保健福祉のサービスを利用するために重要だと言われている (Corrigan et al., 2011)。

我々は精神疾患をもつ当事者の“障害開示”のみに着目せず、生活状況、自分の強み、苦悩の経験など「その人らしさ」に関わる内容の自己開示が重要だと考えてきた (図 1)。その人らしさを開示しながら生活することが、障害を抱えながらも希望や満足に満ちた人生を送るための新しい目的と意味を創りだす“リカバリー”に波及すると考えたためである。これまでに独自に開発した精神疾患をもつ人を対象とした自己開示尺度 (横山 他, 2017) を利用し、身近で重要とする相手への“生活状況”や“自分の強み”の自己開示が自尊感情や主観的健康感の高さに関連することが明らかになった。リハビリテーションの中でこれらの内容を話題に自己開示を促すなど、自己開示研究の知見を応用する意義は大きく、当事者のリカバリー促進に働きかける可能性は高い。特に、地域で生活する当事者は、社会参加の際に様々な相手に自己開示をする機会を有し、その過程で自分らしい生き方を再獲得することが可能になるだろう。

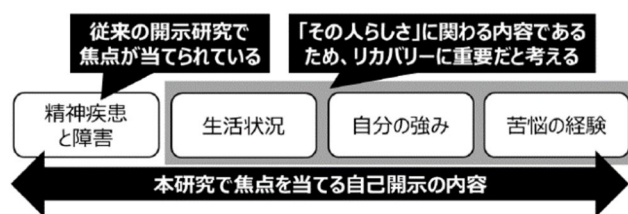


図1：精神疾患をもつ当事者の自己開示の内容

2. 研究の目的

これまでに精神疾患をもつ当事者の自己開示に着眼する意義が示されているが、自己開示とリカバリーの関連は明らかになっていない。また、身近で重要とする他者の中でも、家族・支援者・同じ精神疾患を持つ仲間であるピアサポーターなどの開示対象によって、自己開示がもたらす影響が異なる可能性があるが、その実態は未知である。特に、ピアサポーターは同様の経験を有するため、否定的な内容も話しやすく、リカバリーに良い影響をもたらす可能性がある。本研究では、地域で生活する精神疾患をもつ当事者の自己開示量を対象別および内容別に調査し、リカバリーの促進に影響する自己開示の要因を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

精神科デイケア、障害福祉サービス事業所（生活訓練、就労継続支援 B 型など）において、研究協力の募集をした。また、ピアサポートの利用経験のある当事者を対象とするために、ピアサポートグループ、ピアサポートフォーラムなどのイベントにおいて、研究協力の募集をした。対象者の選定基準は、「ICD-10 に分類される精神疾患を有する者」「主治医から病名の告知を受けている者」「地域で生活を送る者」「重度の思考障害・認知障害を呈さない者」「精神遅滞もしくは脳機能障害を合併しない者」「20 歳以上である者」とした。

(2) データ収集

自己開示量は、精神疾患をもつ人を対象とした自己開示尺度 (横山 他, 2017) を用いた。この尺度は、「生活状況」「自分の強み」「精神疾患と障害」「苦悩の経験」の 4 因子に関わる 23 項目の自己開示内容を 4 件法で尋ねるものであり、高得点ほどそれらの内容の自己開示量が多いことを示す。今回は、家族・支援者・同様の病気や障害をもつ当事者のうち、日常的に関わりのある相手を開示対象として設定した。また、開示対象との関係性を事前に聴取し、情緒的支援ネットワーク認知尺度 (宗像, 1986) を用いて、その相手からの情緒的支援の程度を調査した。この尺度は情緒的支援認知を表す 10 項目を 2 件法で尋ねるものであり、高得点ほど情緒的支援ネットワーク認知が強いことを示す。リカバリーは、日本語版 24 項目版 Recovery

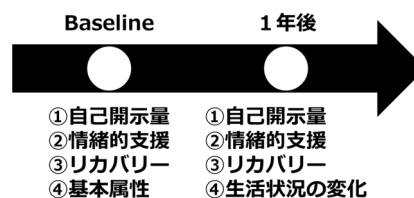


図2：データ収集の流れ

Assessment Scale (Chiba et al., 2007) を用いた。この尺度は「目標/成功志向・希望」「他者への信頼」「自信をもつこと」「症状に支配されないこと」「手助けを求めるのをいとわないこと」の5因子に関わる24項目を4件法で尋ねるものであり、高得点ほどリカバリーの程度が進んでいることを示す。同時に、対象者の基本属性として、年齢、性別、生活形態、病名、発病年齢、利用中の精神科サービスに関する情報も収集した。1年後に同一の対象者に再度アンケートを依頼し、フォローアップ調査を行った。同時に1年間の生活状況の変化も質問項目を設定して尋ねた(図2)。

(3) データ分析

対象者の基本属性の集計後に、自己開示量・情緒的支援・リカバリーのスコアの平均値と標準偏差を算出した。次に、開示対象の情緒的支援の結果より、開示対象を3群(弱い情緒的支援、中程度の情緒的支援、強い情緒的支援)に分け、自己開示を内容別に比較した。さらに、リカバリーに関わる自己開示の要因を検討するため、リカバリーのベースラインとフォローアップの変化量を従属変数、自己開示の内容別のベースラインとフォローアップの変化量を独立変数とした重回帰分析を実施した。なお、調整変数として、年齢、性別、居住形態を投入した。データ解析には IBM SPSS Statistics for windows, version 27.0J (IBM Corp., Armonk, N.Y., USA) を使用し、有意水準は両側5%とした。

(4) 倫理的配慮

本研究は、所属機関倫理委員会の承認を受けた。対象者には、研究の目的および方法、協力の任意性と撤回の自由、研究計画等の開示、予期される危険性、個人情報保護、研究成果の公表、費用負担に関する事項に関する内容を書面で説明し、同意書への記入をもって研究同意を得た(承認番号30-2-8)。

4. 研究成果

(1) 対象者の基本属性

ベースラインの対象のうち、1年後のフォローアップ調査まで参加したのは54名であった。ベースライン時の対象者の平均年齢は 41.1 ± 8.6 歳であり、男性25名(46.3%)・女性26名(48.1%)・その他3名(5.6%)であった。また、Recovery Assessment Scaleの平均得点は、 84.6 ± 15.8 点であった。

(2) 情緒的支援の程度による自己開示量

家族に対する自己開示の場合、全ての内容(生活状況、自分の強み、精神疾患と障害、苦悩の経験)において、中程度および強い情緒的支援の群は、低い情緒的支援の群と比較して、有意に自己開示量が多いことが明らかになった。

支援者に対する自己開示の場合、生活状況の自己開示量は3群に有意差はみられなかった。一方で、その他の自己開示の内容(自分の強み・精神疾患と障害・苦悩の経験)は、強い情緒的支援の群は、低い情緒的支援の群と比較して、有意に自己開示量が多いことが明らかになった。

同様の病気や障害をもつ当事者に対する自己開示の場合、全ての内容(生活状況、自分の強み、精神疾患と障害、苦悩の経験)において、中程度および強い情緒的支援の群は、低い情緒的支援の群と比較して、有意に自己開示量が多いことが明らかになった。

以上より、家族や同様の病気や障害をもつ当事者に対しては、情緒的支援が中等度以上になれば、いずれの内容の自己開示量も増加する可能性が示された。一方で、支援者に対しては、情緒的支援が強くなると、自分の強み・精神疾患と障害・苦悩の経験についての自己開示量が増加しない可能性が示された。

(3) リカバリーの変化量に関わる自己開示の要因

1年間のリカバリーの変化量を従属変数とした重回帰分析の結果、開示対象を「家族」とした場合に「自分の強み」「精神疾患と障害」「苦悩の経験」の自己開示量の変化量において有意な正の影響が示された。また、開示対象を「同様の病気や障害をもつ当事者」にした場合には、全ての内容の自己開示量の変化量において有意な正の影響が示された。一方で、支援者を開示対象とした場合には、リカバリーと自己開示量との間に有意な関連性はみられなかった。

上記より、「家族」や「同様の病気や障害をもつ当事者」に対する自己開示量が増加することが、精神疾患をもつ人のリカバリーの促進に影響をもたらしている可能性が示された。

(4) 今後の展望

本研究課題により、地域で生活する精神疾患をもつ当事者のリカバリーの促進に影響する自己開示の要因を明らかにすることができた。しかしながら、精神疾患をもつ当事者の自己開示の背景には、個人の性格傾向や疾病による特性など、他にも考慮すべき要因がある可能性が推察された。また、リカバリーの促進要因である「同様の病気や障害をもつ当事者」においても、ピア

サポーターとの関わりの有無やサービスの利用状況によって、リカバリーに与える影響が異なる可能性も推察された。今後は対象者数や測定因子を増やした上で、本研究で得た成果を多角的に検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 横山和樹, 小笠原那奈, 小笠原啓人, 窪田優美菜, 矢部滋也	4. 巻 25
2. 論文標題 PPI/CPによるピアサポート研究事業の実践：様々な領域におけるピアサポートの活用に向けた包括的支援モデルの構築	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kazuki Yokoyama, Takafumi Morimoto, Satoe Ichihara-Takeda, Junichi Yoshino, Kiyoji Matsuyama, Nozomu Ikeda	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 Peer Support formation and the promotion of recovery among people using psychiatric day care in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Community Mental Health Journal	6. 最初と最後の頁 78-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10597-021-00793-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yokoyama Kazuki, Yabe Shigeya, Morimoto Takafumi, Ikeda Nozomu	4. 巻 17
2. 論文標題 Relationship between Emotional Peer Support Networks and Subjective Recovery of People with Mental Illness Living in the Community	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian Journal of Occupational Therapy	6. 最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11596/asiajot.17.53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 横山 和樹, 小笠原 那奈, 小笠原 啓人, 矢部 滋也, 森元 隆文, 池田 望	4. 巻 3
2. 論文標題 作業療法におけるピアサポートの内容と 作業療法士の役割に関する文献レビュー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 作業療法の実践と科学	6. 最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32151/psot.3.3_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山 和樹, 矢部 滋也, 森元 隆文, 池田 望	4. 巻 24
2. 論文標題 同様の疾患や障害をもつ人への自己開示量と情緒的ネットワークおよびリカバリーとの関連; 精神疾患をもつ人を対象とした自己開示尺度を用いた検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 201-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokoyama K, Morimoto T, Ichihara-Takeda S, Yoshino J, Matsuyama K, Ikeda N	4. 巻 14
2. 論文標題 Relationship between self-disclosure to first acquaintances and subjective well-being in people with schizophrenia spectrum disorders living in the community.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0223819
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0223819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山 和樹, 小笠原 那奈, 小笠原 啓人, 窪田 優美菜, 矢部 滋也	4. 巻 26
2. 論文標題 精神障害に関連する3領域におけるピアサポートの実践と課題: 内容分析によるがん領域との比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 横山和樹, 小笠原那奈, 小笠原啓人, 窪田優美菜, 矢部滋也
2. 発表標題 ピアサポーターの育成に関する現状と課題: 精神障害領域と他の障害領域の比較検討
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第28回愛知大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山 和樹, 矢部 滋也, 森元 隆文, 池田 望
2. 発表標題 精神疾患をもつ人の情緒的支援の知覚と主観的リカバリーとの関係：同様の病気や障害を経験している人からの情緒的支援に着目して
3. 学会等名 第50回北海道作業療法学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山和樹, 森元隆文, 竹田里江, 吉野淳一, 池田望
2. 発表標題 地域で生活する統合失調症者の初対面の人への自己開示が主観的健康感へ及ぼす影響
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山 和樹, 矢部 滋也, 森元 隆文, 池田 望
2. 発表標題 同様の病気や障害をもつ人への自己開示と主観的リカバリーの関連：精神疾患をもつ人を対象とした自己開示尺度による検討
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第27回大阪大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山和樹, 矢部滋也, 森元隆文, 池田望
2. 発表標題 精神疾患をもつ人の情緒的支援の知覚と主観的リカバリーとの関係：同様の病気や障害を経験している人からの情緒的支援に着目して
3. 学会等名 第50回北海道作業療法学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山和樹, 森元隆文, 竹田里江, 吉野淳一, 池田望
2. 発表標題 地域で生活する統合失調症者の初対面の人への自己開示が主観的健康感へ及ぼす影響
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山和樹, 矢部滋也, 森元隆文, 池田望
2. 発表標題 統合失調症をもつ男性におけるピアサポートグループへの参加とリカバリーのプロセス
3. 学会等名 第14回日本統合失調症学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山和樹, 森元隆文, 池田望, 竹田里江, 吉野淳一
2. 発表標題 精神科デイケアを利用する当事者におけるピアサポート形成とリカバリーのプロセス
3. 学会等名 第49回北海道作業療法学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------